

風姿花伝第三、問答条々 四 立合勝負の不審

問。此勝負に於て、是に大なる不審あり。はや劫入たる為手の、しかも名人なるに、只今の若為手の、立合ひに勝つ事あり。これ不審なり。

〔口訳〕 問。立合勝負の勝ち負けについて、一つ大きい不審な事があります。それは、既に年劫を積んだ為手で、しかも名人である為手に、まだ若輩の為手が、立合勝負に於て勝を得る事があることです。そのわけがどうも不思議ですが、どうしたわけでありませうか。

答。これこそ先に申^{まうし}つる、三十以前の時分^{じぶん}の花なれ。古^{ふる}き為手^{して}は、はや花失^うせて、古^{ふる}様^{やう}なる時分に、珍^{めづら}しき花^{はな}にて勝^かつ事あり。真実の目利^ききは、見分^わくべし。さあらば、目利^きき、目利^きかずの、

答。これこそ、前に述べた「三十歳以前の時分、花」による勝利である。老いた為手が、もはや見物の眼を惹きつける花も失せ、古風なものになつてゆく時分に、若い為手が、珍らしさといふ花で以て勝つ事があるものである。しかし、真実に眼の利く鑑賞者は、何れがすぐれてゐるかを、十分に見分けて、一時の珍らしい花などに眩惑される筈はないだらう。かうなると、結局、鑑賞者の目が利いてゐるか、居ないかといふ事の優劣の論になつて来るかと思ふ。しかしながら、ここに仔細

批判^{ひはん}の勝負になるべき歟。

さりながら様^{やう}あり、五十以来まで、花の失^うせざらん程の為手^{して}は、如何なる若^{わか}き花なりとも、勝事^{かつこと}は有^あるまじ。たゞこれ、よきほどの上手^うの、花の失^うせたる故に、

がある。それは五十以後までも芸の花の失せないほどの為手であれば、如何に若さの花のすぐれた為手でも、これに打ち勝つといふ事は無いであらう。若い花の為手に負けるといふのは、ただそれは、普通の上手といふ程度の為手が、自分の花の失せてしまつて居る為に、負けるのである。譬へを以ていへば、如何なる名木といつても、花の咲いて居ない時の木を、賞翫する者があらうか。たとひ犬桜^{ひとへ}の一重の花でも、初花のいろいろ美しく咲いて居る方を誰でも賞翫するに相違あるまい。かや

負^ま事^{くる}あり。いかなる名木
なりとも、花の咲^さかぬ時^{とき}の
木をや見^みん、犬桜^{いんおう}の一重^{ひとへ}な
りとも、初^{はつ}花^{はな}色々と咲^さける
をや見^みん、かやうの譬^{たと}ひを
思^{おも}ふ時は、一旦^{いつたん}の花なりと
も、立合^{かっ}に勝^{ことわり}は理なり。

うな譬へを思つて見れば、たとひ一時
的な時^{とき}分^{ぶん}の花であつても、立合に勝つ
といふことのあるのは理りである。

されば、肝^{かん}要^{よう}、此道^{この}はたゞ
花が能^{のう}の命^{いのち}なるを、花の失^う
するをも知^しらず、本^{もと}の名望^{めいぼう}
ばかりを憑^{たの}む事、古^{ふる}為^し手^て
の、返^{かへ}々^{すく}誤^{あや}り也^ま。物数^{ものかず}をば
似^にせたりとも、花の有^ある様^{やう}
を知^しらざらんは、花咲^さかぬ

前に述べたやうな訳だから、結局、
此の能楽の道に於ては、花^{はな}が、能^{のう}の、命^{いのち}で
あるのに、その命ともいふべき大切な
花が失せて居る事に氣附かず、以前の
名望ばかりを憑んで居るといふのは、
古い為手の重大な誤りである。たとひ、
能の物数を巧みに似せて物真似がうま
くとも、花といふものが如何なる点に
あるものかといふ事を自覚しない為手
の芸は、丁度花の咲かない折の草木を
集めて見るやうなものである。万木千
草に於て、花の色は皆それぞれに異
ものだが、面白い美しいと感ずるのは、

時の草木を集めて見んが如
し。万木千草に於いて、花
の色は皆々異なれども、面
白しと見る心は同じ花な
り。物数は少なくとも、一
向の花を取り究めたらん為
手は、一体の名望は久しか

等しくその花がさいてゐる点にあるの
だ。たとひ演じ得る物真似の数に於て
は少くとも、一方面の花を究め尽した
為手ならば、その一体の芸についての
世の名望は久しくつづくであらう。

るべし。

されば、主の心には、随分
花ありと思へ共、人の目に
見ゆる公案無からんは、田
舎の花、藪梅などの、徒に
咲き匂わんが如し、又、同
上手なりとも、その中にて

かやうな次第であるから、為手自身
の心持では、自分の芸には随分に花が
あると思つて居ても、その花が見物の
目に見える花となつて咲くには、如何
にすべきものかといふ工夫公案がなく
ては、田舎の花や藪梅などが、徒らに
咲き匂ふやうなもので、誰もこれを美
しい花とは賞翫しない。又、同じ上手
といつても、又その間には段階がある
ものだ。たとひ芸に於ては随分に究め
尽した上手名人でも、この花といふも

重々あるべし。たとひ、随

分究めたる上手名人なりと

も、この花の公案なからん

為手は、上手にては通ると

も、花は後までは有るまじ

き也。公案を究めたらん上

手は、たとひ能は下がると

も、花は残るべし。花だに

残らば、面白さは一期ある

べし。されば、真の花の残

りたる為手には、いかなる

若き為手なりとも、勝つ事

はあるまじきなり。

のについて工夫公案することを欠いては、上手な人だとしては世間に通つても、花が後まで凋落せずにつづく事があり得ないだらう。花に関する工夫公案を究めた上手ならば、たとひ老いて伎芸は下つても、花は生涯残るであらう。花さへ残るならば、その人の芸の面白さの魅力は生涯あるに相違ない。だから真の花が残つて居る為手に対しては、如何に若く時分の花の匂はしい為手でも、勝つ事は不可能だと思ふ。

「花が能の命」といふ一語がこの段の眼目である。その例は前半に先づ露骨に例証せられて居る。劫の入つたしかも名人とまで許された為手が、駆け出しホヤ／＼の若為手に、立合勝負で後れを取るなどは、全く花の問題に心をひそめ工夫をこらさぬ所からの蹉跌である。真の花に敗れるならばとにかく、一時的な時分の花、珍しい花などで敗れをとるなどは、上手とも言はれるものには堪へられない無念ではあるまいか。勿論、眼識ある批評家は、勝を得た理由が一時の花にあつて、真の芸の花でないことは看破するであらうけれども、盲千人眼開めあき一人の世の中では、批判の高下などは一般的には通用しない。ここに舞台芸術家の悩みもあり、又工夫の必要も生れるわけである。

しかし、これは、世阿弥に言はすれば「よき程の上手」であり、花の失せたことに気づかぬ程度の為手なのである。五十以後まで花の失せない為手ならば、如何なる若い花でも勝てつこは無いといふ。世阿弥がこの鉄案を下す際に、彼の眼裏に彷彿と去来したものは、亡父観阿の面影であつたらう。

どんな名木でも花の無い際の木を、誰が賞翫するものか、たとひ、

犬桜の一重咲きでも、花さへ咲けば人が見るではないか。この譬へも痛切、骨をさす感がある。本の名望を憑むほど、他所目に気の毒に映ずるものはない。

次の問題は「花の公案」に移る。「花のあるやうを知る」ことであり、「人の目に見ゆる公案をつくす」ことである。ここでははつきりと、伎芸と公案とを区別して居る。後に「種はわぎ、花は心」といふ語を提出して来るが、その「花は心」の問題に進めて居る。そして、この「花の公案」だに透過するならば、たとひ伎芸はよし少々落ちてても、花は決し

て散らないし、花さへ残るならば、見物の心を惹く面白さは生涯失せないだらう、さすれば、如何に若い花でも、決してこれに後れを取る事はないといふ。かく攻めたてて来る時、何人も「花の公案」が如何に重大なものであるかを感じざるを得ない。しかし世阿弥は満を持して放たない。その解答は、別紙口伝にまで持ち越されてゐる。不親切なやうで親切を極めたものである。先づ考へしめる、先づ苦しませる、そして機の熟するのを待つて、以心伝心、電光石火の間に大悟徹了せしめる行き方の妙味はここにある。

